

「ビザンティン・コモンウェルス」論再考 (4) — バルカン半島のスラヴ諸国における政治文化の視点から —

唐澤 晃一

1. はじめに

オボレンスキーは、その著書『ビザンティン・コモンウェルス』(1971年)のなかで、ビザンツ帝国とスラヴ人の政治・文化交流について論じているが、そのさい、「ビザンティン・コモンウェルス」の統合された形と、歴史的な多様性をもっともよくあらわれているのは、文化の領域であると述べている¹。ビザンティン・コモンウェルスとは、その中心をコンスタンティノープルにおき、ビザンツ皇帝を頂点とし、スラヴ人等の周辺諸民族を下位におく国際的な共同体のことである。この共同体に含まれる地域は、西はアドリア海沿岸から東はコーカサス山脈、南はペロポネソス半島から北はロシア北部であった。ビザンツ文明は、この広大な地域に様々な時と程度により伝播していったので、その浸透度は地域によって多様であったことはたしかであろう。

本論では、『ビザンティン・コモンウェルス』をふまえて、13世紀と14世紀のブルガリアならびにセルビアの政治文化にみられるビザンツの影響について考えてみたい。ビザンツ皇帝がこれら二か国の支配者に授与した「冠」や、彼らが身につけた儀礼用の衣装や王笏といった支配権の象徴、あるいは即位時の誓約といった点については、考察が進んでいないと思われる部分もあるからである。オボレンスキーの研究以後、ブルガリアとセルビアにかんしては、ビザンツ世界の、政治文化上の統合力や共通性については、シェパードの論²を除き、本格的な研究はあらわれていないようにみえる。

王冠概念にかんする史料は、第二次ブルガリア王国では限られており、限定的な結論しか出しえないが、14世紀のセルビアでは、中世の西欧や東中欧にみられる、個人としての王を超えた高次の国家概念に類似する概念があったことが史料からうかがえる³。ただし、セルビア王冠は、史料のなかで、その記述のされ方において、西欧の王冠概念と異なる点がみられる。それは、ビザンツにおける政治文化の影響なのであろうか。この点を解明するためには、まず、ビザンツ帝国がセルビア、ブルガリアの支配者にどのように王冠など、支配権の象徴を授与したかを知る必要がある。また、それらが、この二か国において修道院や教会のフレスコ画のなかでどのように

¹ D. Obolensky, *The Byzantine Commonwealth: Eastern Europe, 500-1453*, New York-Washington D. C. 1971, p. 272. (以下、Obolensky, *The Byzantine Commonwealth*. と略)

² J. Shepard, "Crowns from basileus, crowns from heaven," in: *Emergent Elites and Byzantium in the Balkans and East-Central Europe*, Farnham 2011, pp. 139-159.

³ A. В. Соловьев, "Појам државе у средњовековној Србији: Студија из упоредне историје права," *Годишњица Николе Чуича*, 52 (1933), 64-92.

描かれているのかということについて検討することも、政治文化について論じるうえで重要となる。あるいは、いま一つの問題として、セルビアの王冠概念が、西欧の国王が即位時におこなった不可譲誓約のような形で史料にあらわれない原因として、ビザンツにおける政治文化の影響が考えられるのかどうかを検討することも重要となる。この点については、これら二か国の支配者による即位時の誓約を、14世紀半ば頃にビザンツで編纂されたプセウド・コディノスによる『官職について』に記された、ビザンツ皇帝による即位時の誓約と比較して考えてみたい。

2. 研究史

オボレンスキーは、ビザンツの法や宗教、美術、文学が周辺諸国にどのように伝播したのかについては論じているが、支配権の象徴といった、政治文化の伝播についてくわしく論じているわけではない。だが、かれが『ビザンティン・コモンウェルス』の第9章で、文明の伝播について論じた箇所は、本稿においても参考になる。したがって、まずこの点にかんするかれの論について触れておきたい。オボレンスキーは、コンスタンティノープル教会によるキリスト教の伝道を三つの段階に分けて概観している⁴。第一の段階は、キリスト教の影響が受容者の側にとって、まだ「遠方の脅威」とみなされた時期である。この段階においては、受容者は異教を信仰しており、キリスト教の受容は選択肢の一つでしかない。支配者がキリスト教を受容しようとしても、家臣や臣民が異教を信仰しているため、反感を買うのを恐れて躊躇しているのである。次に、第二の段階は、支配者がキリスト教を受容し、キリスト教による、異教的伝統への攻撃が始まった時期である。キリスト教受容後の第一次ブルガリア王国（9世紀）が、その例である。そして第三の段階は、宮廷や大都市が十分にキリスト教化され、キリスト教の影響が地方にも及び始めた時期である。この段階では、支配階層は、少なくとも公的生活の面ではビザンツ文明の模倣に努めており、宮廷儀礼や宮廷衣装はビザンツ化され、公共建築物もビザンツの様式に倣って建設されている。9～10世紀以降のブルガリア、12世紀以降のセルビアが、この段階にあたる。本論で検討する政治文化の模倣も、この段階でなされたといえる。

オボレンスキーによれば、こうした文明の受容が、受容者によって受動的になされたことはほとんどなかった。ビザンツ文明の模倣は、コンスタンティノープル教会やビザンツ外交の当局者が主導しただけでなく、そこには受容者による取捨選択のプロセスが混ざっている。ビザンツ文明の伝播は、受容者が、地域の土壌や要請に合わせて、ビザンツから受容しうる部分は受容し、受け入れられない部分は拒否、ないし作り替えるといったプロセスをとまう⁵。

またオボレンスキーは、ビザンツ圏東ヨーロッパ諸国における文学や美術について論じた箇所（同書、第11章）で、ビザンツ美術が東欧の諸地域において示す多様性は、「エスニックな」特殊性、

⁴ Obolensky, *op. cit.*, pp. 284-286.

⁵ Obolensky, *op. cit.*, p. 278.

あるいは「ナショナルな」傾向に由来するとみなさないほうが、より安全であるとしている。そのさいかれは地域的な多様性は、各地における聖俗のパトロンと密接なかかわりをもつ工房の特質と関係があると指摘している⁶。

別の論文でオボレンスキーが述べたように⁷、中世には、近代以降のナショナリズムは存在しない。政治文化や文化に地域的な特質がみられるとしても、それは、近代以降のナショナリズムとは異なる。また、中世のブルガリアやセルビアの文化に、何らかの地域的な特質がみられ、それが、特定の社会集団の意識と結びつけられうるものであるとしても、それは、同時代の西欧における何らかの集団意識や国家意識と比較して、強いものであったとはいえないとされる。

ビザンツ皇帝が周辺諸君主に授与した支配権の象徴 (insignia) については、オボレンスキーも『ビザンティン・コモンウェルス』のなかで触れているが⁸、この分野では、近年、進展がみられる。たとえばシェパードは、①ビザンツ皇帝が帝国外の支配者に王冠を授与する習慣、②ビザンツ皇帝が天上から皇帝冠を授与されたことを示す資料、③非ビザンツ諸国の支配者が天上から王冠を授与されたことを示す資料を検証している⁹。第一次ブルガリア王国においては、シメオンやその息子ペタルが王冠を戴いた姿で描かれた印章があり、第二次ブルガリア王国においても、国王が王冠を戴く姿で描かれたフレスコ画が残されている。しかし、14世紀半ば以前には、ブルガリア王が聖人やキリストから王冠を授与された像が残された例は稀であると指摘している¹⁰。この点は、セルビアにおいても同様であり、13世紀に支配者が神や天上から王冠を授与された姿で描かれた例はきわめて少ない¹¹。こうした例から、シェパードは、14世紀以前のブルガリア、セルビアの支配者は、天上から王冠を授与された姿で自分を描かせることを控えたとし、ここに「ビザンティン・コモンウェルス」の政治的規制力がネガティブな形で浮き彫りにされていると指摘する¹²。

第二次ブルガリア王国における政治思想については、さしあたり、ビリアルスキの論をあげておきたい¹³。ビリアルスキは、君主文書や聖人伝に記された「王冠 (вънъць, диадима)」、「王笏 (жъзль, скиптро)」、「玉座 (прѣстоль)」、「軍旗 (хороугва)」、「紫衣 (багрѣница)」といった支配権の象徴について論じている。ブルガリアの諸史料において、ビザンツを起源とする様々な語彙は、支配権力、官位・爵位制度、徴税・財政制度、教会制度や聖職者の名称など、多岐に

⁶ Obolensky, *op. cit.*, p. 348.

⁷ D. Obolensky, "Nationalism in Eastern Europe in the Middle Ages," in: *The Byzantine Inheritance of Eastern Europe*, chapter XV, pp. 1-16. (以下、Obolensky, "Nationalism in Eastern Europe." と略)

⁸ Obolensky, *op. cit.*, pp. 288-289.

⁹ Shepard, *op. cit.*

¹⁰ Shepard, *op. cit.*, pp. 152-153.

¹¹ Shepard, *op. cit.*, p. 155.

¹² Shepard, *op. cit.*, p. 159.

¹³ I. Biliarsky, *Word and Power in Mediaeval Bulgaria*, Leiden-Boston 2011. とりわけ同書の、pp. 225-227. を参照。

わたり借用されているが、王冠や玉座もその例であることが示されている。

一方、セルビアのフレスコ画に描かれた支配権の象徴については、美術史家のラドイッチが論じている。ラドイッチによれば、13世紀前半の、ステファン初冠王ならびにその息子ラドスラヴは、フレスコ画においてビザンツの専制公やセバストラトルが戴く冠を頭上に載せている（これは、ステファン初冠王が1195年頃、ビザンツからセバストラトルの称号を授与された事実を反映したものであろう）¹⁴。その後、支配権の象徴について、その描かれ方は、時とともに、さらにビザンツ化が進み、ミルティン王の治世には、その王冠はもはやビザンツにおける皇帝冠の描かれ方と異ならないものになったとされる¹⁵。

中世西欧における研究を視野に入れて、歴史学の立場からラドイッチの論を発展させたのは、ドウシャニッチである。ドウシャニッチも、13世紀から15世紀のセルビアにおける記述史料、フレスコ画、貨幣、印章を分析し、王冠、玉座、王笏のありかたについて考察している¹⁶。ドウシャニッチによれば、この地は東西ヨーロッパの境界上にあり、したがってその政治文化も雑種文化であった¹⁷。しかし13世紀末から14世紀にかけて、ミルティン王の治世に王権を象徴する様々な標がビザンツから受容され、この傾向がドウシャン王の治世にもっとも顕著になったと論じている¹⁸。ただし、ローマ・カトリック教会の影響が強い、ダルマチア沿岸の教会では、西欧型の、頭頂部が開いた形の王冠が描かれる場合もあり、こうした視点から西欧文化の影響についても論じている点は、興味ぶかい。

セルビアにかんしては、美術史家のガヴリロヴィチによる考察も、参考になる。1349年にレスノヴォ修道院の教会正面北側の壁に描かれたフレスコ画では、キリストが天上からドウシャン王とその家族に王冠を授与する姿が描かれているが、ガヴリロヴィチは、ここに支配者が神の叡智によって照らし出され、民を統治するというモチーフを読み取った¹⁹。神の叡智が支配者を照らすというモチーフは、ガヴリロヴィチが別の論文でも論じているように、コンスタンティノープルの聖ソフィア大聖堂におけるナルテックス・モザイクにみられるものであり²⁰、バルカン半島の周辺諸国がビザンツ文明の諸要素を、比較的自由に作り替えて受容していたことをうかがわせる。

¹⁴ С. Радојчић, *Портрети српских владара у средњем веку*, Београд 1996.

¹⁵ Радојчић, *op. cit.*, 110.

¹⁶ С. М. Душанић, *Владарске инсигније и државна симболика у Србији од XIII до XV века*, Београд 1994.

¹⁷ 拙著『中世後期のセルビアとボスニアにおける君主と社会 — 王冠と政治集会 — 』刀水書房、2013年、13、154頁。

¹⁸ Душанић, *op. cit.*, 163-164.

¹⁹ Z. Gavrilović, "Divine Wisdom as Part of Byzantine Imperial Ideology Research into the Artistic Interpretations of the Theme in Medieval Serbia," in: *Studies in Byzantine and Serbian Medieval Art*, pp. 52-53, "Kingship and Baptism in the Iconography of Dečani and Lesnovo," in: *Ibid.*, pp. 144-145.

²⁰ Z. Gavrilović, "The Humiliation of Leo VI the Wise: The Mosaic of Narthex at Saint Sophia, Istanbul," in: *Ibid.*, p. 30. なお、聖ソフィア大聖堂のナルテックス・モザイクにかんしては、以下も参照。浅野和生『イスタンブールの大聖堂 — モザイク画が語るビザンティン帝国 — 』中公新書、2003年、109 - 132頁。

以上の先行研究を踏まえて、筆者の立場を示しておきたい。ビザンツ帝国は、滅亡にいたるまで周辺諸国にたいして文化の優位性を保った。そのことは、教会美術におけるビザンツの影響から考えて明らかであろう。ただし、政治文化においてビザンツ帝国が周辺諸国にたいして有した優位性にかんしては、時代ごとの変遷をできる限り正確に把握する必要もある。その意味で、ビザンツにおける14世紀以降の政治変動を、「天上からの王冠」という視点から、政治文化の問題と関連づけて論じたシェパードの指摘は重要といえる。ただし、この「天上からの王冠」が、セルビアでは、記述史料にみられる王冠の記述や、フレスコ画に描かれたネマニッチ家の家系樹など、他の文脈とどのように関連づけられるかという点が未解明となっている。たとえば、別稿で論じたように²¹、この地の君主文書には、「王冠」が、文書の規定を改変したり破棄したりする者にたいし罰を加えるという文言がみられるが、こうした、王冠の威嚇する力は何に由来するのだろうか。この点について考えるうえで、シェパードの論は参考になる。

第二次ブルガリア王国にかんしては、史料上の制約により、政治文化についての考察は困難がともなう。しかし、現存する史料およびフレスコ画から判断する限りでは、ブルガリア王冠は、政治思想のうえでも、またその外観も、ビザンツ皇帝冠をそのまま模倣しているように思われる。即位時の誓約については、その内容を何らかの形で反映していると考えられる文言が、君主文書のなかにみられるので、その点を検証する必要がある。

3. 支配権の象徴としての王冠

現存する史料をみる限りでは、第二次ブルガリア王国では、セルビアの場合と同様に、個人としての王を超えた、抽象的な「支配権」が記される場合がある。たとえば、1342年にイヴァン・アレクサンデル王はアトス山のゾグラフ修道院に黄金印璽付き文書を発給しており、そのなかで、神が同王を「祖父ならびに曾祖父の玉座」に据えたと記している。

イエス・キリストは、その、もっとも清き御母の慈悲と仲介によって、余を、余のブルガリア帝国の玉座に据えて下さった。というのは、それは余の帝国の祖父ならびに曾祖父のものである²²。

ここで「玉座」は、アセン王朝の先祖代々に伝わる支配権の象徴とされており、その点で、「玉座」は王朝の象徴とみなすことができる。同様に、同王が1347年に聖ニコラ修道院に発給した黄金印璽付き文書にも、個人としての王を超える支配権の象徴として「王笏」が記されている²³。こ

²¹ 唐澤、前掲書、163－165頁。

²² G. A. Ilyinskiy, *Gramoty bolgarskikh carey*, London 1970, 22. (以下、*Gramoty*. と略)

²³ この黄金印璽付き文書については、英訳を参照した。*The Voices of Medieval Bulgaria, Seventh-Fifteenth Century: The Records of a Bygone Culture*, trans., K. Petkov, Leiden-Boston 2008, pp. 497-498. (以下、*The*

の例で興味ぶかいのは、将来、ブルガリアの玉座に据えられる者として、王家以外の者も指定されていることである。

余の帝国〔すなわちイヴァン・アレクサンデル王自身〕が死去した後においてさえ、誰が余の帝国の相続人となるにせよ、それが余の帝国の愛されたる子供たちであれ、その他の、神が余の帝国の玉座に据えるために選んだ者であれ、正統なる信仰をもつキリスト教徒の誰かであれ、この、余の帝国による神による黄金印璽付き文書を撤廃したり、無効にしたりすることを考えてはならない²⁴。

これと同じ文言は、同王が1347年にヴェネツィア共和国との間に締結した条約文書にもみられる²⁵。こうした例から考えると、第二次ブルガリア王国の「玉座」は、現代における国家概念とは別物であるとはいえ、王家の家産でない何か、すなわち、高次の国家概念をあらわしていると解釈することは可能であろう。

同じ文言は、セルビア王国にもみられる。デチャンスキ王が1330年にオレホヴォの聖ニコラ・ムレチュキ修道院に発給した寄進文書のなかで、同王は、次のような仕方で文書内容が遵守されるよう命じている。

余の死後、誰が余の王国の継承者になろうとも、すなわち、余の王国の息子や親戚、あるいは、その他、神が選んで余の王国の玉座に据える者は誰であれ、余の王国が発給した、この黄金印璽付き文書を破棄したり改竄したりしてはならない²⁶。

後に述べるように、セルビアのネマニッチ朝には、フレスコ画に描かれた家系樹の例から、比較的強い王朝意識があったことが知られている。ネマニッチ朝の家系樹とは、同家の家系を一本の樹になぞらえたもので、始祖のネマニャを根とし、歴代王を枝とする樹をさす。しかし、この「玉座」にかんする例では、王家以外の者が将来、王位に就く可能性は排除されていない。

第二次ブルガリア王国における「王冠」については、記述史料には数点の例しかない。カロヤン王が1204年にローマ教皇インノケンティウス三世に宛てた書簡、そして、イヴァン・シシュマン王が1378年にリラの聖イヴァン修道院に発給した黄金印璽付き文書がそれである。1204年の書簡には、同年中にカロヤン王がローマ教皇から王冠を授与されたことが記されている。カロヤン王は、すでに1202年からローマ教皇に王冠の授与を求めているが、1204年の第四回十字軍

Voices. と略)

²⁴ *Ibid.*, p. 499.

²⁵ Г. Бакалов, *Средновековният български владетел: Титулатура и инсигнии*, София 1995, 225.

²⁶ *Одабрани споменици српског права (од XII до краја XV века)*, ed., А. В. Соловјев, Београд 1926, 111.

によるコンスタンティノープル占領の後、ローマ教皇の使節から王冠を授与された²⁷。この書簡には、次のように書かれている。

主なる〔使節の〕レオ、すなわち使徒の座の使節が余の帝国に来て、王冠をもたらした。かれはそれ〔王冠〕に祝福を与え、余の帝国の頭にそれを載せた。また、余の手に王笏と軍旗を与えた²⁸。

この記述のあとで、同王は、ローマ教皇に謝意を表明したうえで、第4回十字軍によるコンスタンティノープル征服以後、十字軍がブルガリア領を侵害していることを述べている。そして最後に、ブルガリアから教皇庁に二名の少年を派遣するので、教皇庁において彼らにラテン語を学ばせ、通訳として養成するよう依頼している²⁹。

この後、第二次ブルガリア王国では、王冠概念はどのように発展したのだろうか。スラヴ語史料には、この点をうかがわせる文書があまり残されていない。1378年にイヴァン・シシュマン王が発給した黄金印璽付き文書には、前文に、「皇帝〔ブルガリア国王〕は、宝石と真珠で覆われたディアデマで自身を飾った。しかしそれだけでなく、堅信と信仰、神の聖なる教会への崇拝によって自身を飾った」と記されている³⁰。この文書については、その真性をめぐり議論がなされているが³¹、本論では、この文書が偽文書であるという立場は取らない。

「宝石と真珠で覆われたディアデマ」という言葉は、セルビアのドゥシャン王がアトス山のヒランダル修道院に発給した二通の寄進文書にもみられる³²。「ディアデマ」という表現から考えて、14世紀のブルガリア、セルビアは、ビザンツにおける皇帝冠から政治文化の上で影響を受けていたのであろう。

セルビア王国における王冠については、実際にビザンツから授与された例がある。ラドイッチが指摘したように、フレスコ画に描かれたステファン初冠王の冠はビザンツにおけるセヴァストクラトルの冠であり、それは、同王がビザンツ皇帝からセヴァストクラトルの称号を授与されたことを反映したものと考えられる。またミルティン王もビザンツ皇帝から冠を授与されている。この冠にかんしては、ニケフォロス・グレゴラスの『歴史』に、記述がある。1308年から1316

²⁷ J. V. A. Fine Jr., *The Late Medieval Balkans: A Critical Survey from the Late Twelfth Century to the Ottoman Conquest*, Ann Arbor 1987, p. 81.

²⁸ И. Дуйчев, “Преписката на папа Инокентия съ българитѣ,” *Годишникъ на университета св. Климентъ Охридски, Историко-Филологически Факултетъ*, томъ 37 (1942), 65-66.: quod dominus Leo, legatus apostolice sedis, venit ad imperium meum sibi afferens coronam et eam benedicens super caput imperii mei imposuit et in minibus meis dedit michi sceptrum atque vexillum.

²⁹ *Ibid.*, 66.

³⁰ *Gramoty.*, 26.

³¹ *The Voices.*, p. 503.

³² A. B. Соловьев, *op. cit.*, 81.

年の記述として、ビザンツ皇帝アンドロニコス二世パライオロゴスの妃エリニ（ヨランダ）は、1292年にセルビアとの間に締結された婚姻条約を確実なものとするべく、ミルティン王にローマ皇帝貨、「カリプトラ（καλύπτρα）」と呼ばれる冠、高価な衣装を贈った。

〔帝妃エリニは〕 どうして自分の願いをかなえたらよいか分からず、義理の息子〔ミルティン〕の頭に置くための冠を贈った。それは、高価な宝石と真珠を散りばめた冠であり、彼女の夫である皇帝アンドロニコスが戴くそれとほとんど同じものであった³³。

この記述につづく箇所、グレゴラスは、そうしたことは皇帝と帝妃の慈悲をないがしろにし、ミルティンの願いを満たすためになされたのであり、「誰も、ローマ人のもとから失われ、セルビア王に与えられた、皇帝の高価な品々の数を数え上げることはできない」と嘆じている³⁴。上記の記述で、「高価な宝石と真珠を散りばめた冠」という言葉は、スラヴ側の史料にみえる「宝石と真珠で覆われたディアデマ」に一致する。

この冠は、グラチャニツァ修道院に1318年から1321年にかけて描かれたとされるミルティン王のフレスコ画にみられる王冠ではなかろうか³⁵。このフレスコ画においてミルティン王は、頭上に天使から王冠を戴く姿で描かれている。この冠は、頭頂部が閉じた形の、ビザンツではコムネノス朝期以降にみられた様式の冠であり³⁶、それはグレゴラスの記述とも一致する。

スラヴ側の記述史料には、このとき、同王がビザンツ皇帝から授与された冠そのものについては記述がないが、この時期にビザンツから様々な贈与があったことについては、記されている。ダニール二世による『セルビアの諸王ならびに大主教の伝記』には、「ミルティン王伝」のなかで、同王の戴冠が述べられた後で、「皇帝に名を連ねる人々」が同王を愛し、「皇帝が慈悲を垂れて王に敬意を表し」、「たとえようもないほどの皇帝の贈り物を山と積んだ」、と記されている³⁷。ここでは、ビザンツ皇帝は「皇帝」という一般的な表現で記されているが、先にあげた、グレゴラスが述べる冠やローマ皇帝貨、衣装の授与が述べられていると解釈して差し支えない。

グレゴラスは「カリプトラ」について、ドゥシャン王が1345年に「セルビア人とロマニアの皇帝」として即位したことについて記した箇所においても言及している。

³³ Nicephori Gregorae byzantine historia: Graece et Latina, vol. 1, ed., L. Schopen, New York 2012, 242.: μὴ δυναμένη δ' ἄλλως τὸ καταθύμιον ἐκπερᾶναι, φέρουσα καλύπτραν ἐπέθηκε πρότερον τῇ κεφαλῇ τοῦ γαμβροῦ λίθοις καὶ μαργάροις πολυτελεσί κεκοσμημένην, ὅποσους καὶ οἷοις μικροῦ καὶ ἢ τοῦ ἀνδρός αὐτῆς Ἀνδρονίκου τοῦ βασιλέως ἐκεκόσμητο.

³⁴ Ibid.

³⁵ Радојчић, *op. cit.*, 183.

³⁶ E. Piltz, "Middle Byzantine Court Costume," in: *Byzantine Court Culture from 829-1204*, ed., H. Maguire, Washington D. C. 2020 (fourth printing), pp. 40-41. (以下、*Byzantine Court Culture*. と略)

³⁷ Архиепископ Данило и други, *Животи краљева и архиепископа*, ed., Ћ. Даничић, Загреб 1866, 105-106.

王〔ドゥシャン〕は〔中略〕自分をローマ人の皇帝と宣言し、野蛮人の生活を改めてローマ人の習慣を採用した。そして公式に支配者の冠と素晴らしい衣装をまとった。それらは、大きな名誉にふさわしいものであり、この者は現在に至るまで、それらを用いている³⁸。

グレゴラスが、この「冠」について、ドゥシャンの「大きな名誉にふさわしいもの」と認めていることから考えれば、この冠も、ミルティン王の王冠と同様に、ビザンツに由来する冠と考えられる（ただし、ミルティン王が授与された王冠と同じ王冠であるか否かについては、検討の余地がある）。なお、この冠は、1349年にレスノヴォ修道院に描かれたフレスコ画にみられる王冠と同じものである可能性がある。このフレスコ画において、ドゥシャン王はビザンツ様式の、頭頂部が閉じた王冠を戴いている³⁹。

13世紀初めから14世紀半ばにおけるセルビア王冠の変遷については、次のようにまとめることができる。王冠の起源は、13世紀初めにローマ教皇庁がステファン初冠王に授与した王冠にあった。しかしこの後、13世紀末～14世紀半ばにかけて、この国がビザンツに政治的に接近し、実際にビザンツから冠を授与されるにおよび、国家も、ビザンツ的支配理念にもとづく統治体制に再編されていった。その過程で、政治思想にも、西欧起源の王冠とは異なるビザンツの皇帝冠の要素が混入していった。

ビザンツ帝国では、ヘザリントンが指摘するように、皇帝から次の皇帝へと引き継がれる唯一の皇帝冠という理念は知られていない。後期のビザンツ帝国で用いられていたのは、複数の皇帝冠であった⁴⁰。唯一の王冠に、永続性と抽象的な国家概念が宿るという政治思想は、西欧や東中欧に固有の特質と考えられる。ビザンツと同様に、14世紀のセルビアでは、儀礼上、セヴァストクラトルの冠、ローマ教皇から授与された王冠、そしてミルティン王がアンドロニコス三世から授与された冠、といったように、複数の王冠が用いられていた可能性がある。そうであるとすれば、その点においてビザンツの政治文化とは同質性があることになる。実際、後述するように、君主伝のなかでは、セルビア王冠は「滅びやすく、移ろいやすい」ものと記されている。この点でも、おそらくビザンツにおける政治文化と共通性があると考えられる。

しかし、14世紀の君主文書にみられる、威嚇する王冠にかんする文言、すなわち、「罪深き者であるが、この余から、そして、王冠から罰が下るように」という文言から分かるのは、そこに

³⁸ Nicephori Gregorae byzantine historia: Graece et Latina, vol. 2, eds., I. Bekker, L. Schopen, Bonnae 1830, 746-747.: ὁ Κράλης [...] βασιλέα Ῥωμαίων ἐαυτὸν ἀνηγόρευσε, τήν τε βάρβαρον δίαίταν ἐς τὰ Ῥωμαίων ἡμειψεν ἥθη καὶ καλύπτρα καὶ πάσαις στολαῖς διασήμοις, ὅποσαι τῇ μεγάλῃ ταύτῃ γε προσήκουσιν ἀρχῇ, περιφανῶς ἐχρήσατό τε καὶ χρῆται γε μέχρι καὶ ἐς ἐμέ.

³⁹ Радојчић, *op. cit.*, 194.

⁴⁰ P. Hetherington, "The Jewels from the Crown: Symbol and Substance in the Later Byzantine Imperial Regalia," *Byzantinische Zeitschrift* 96 (2003), 161.

個人としての国王とは別物の、高次の国家概念が認められるということである。文言のうえで、「余」、すなわち個人としての国王と、「王冠」、すなわち個人としての王を超えた抽象的な国家は、区別されている。これは、おそらく同時代の西欧や東中欧における「王国の王冠」の影響と考えられる。たとえば、14世紀のイングランドにおいては、貴族による忠誠の宣誓は、「王の人格というよりはむしろ、王冠のゆえに」なされている⁴¹。別稿で考察したように、威嚇し、しかも「滅びやすく移ろいやすい」この地の王冠概念は、西欧型の「王国の王冠」と、ビザンツ皇帝に由来する冠の折衷であったという解釈を、ここでいま一度、確認しておきたい。

グラチャニツァ修道院のフレスコ画にみられるように、ミルティン王は天上からビザンツ様式の、頭頂部が閉じた形の王冠を授与される姿で描かれている。このように、14世紀のセルビアにおける支配者が教会美術において「天上からの王冠」をより多く表現するようになったのは、バルカン半島における政治変動を背景として、「神による支配権の委任」という政治思想が十全の意味で発展したからではないだろうか。そして、ほぼ同時期に、西欧ならびに東中欧における王冠概念がこの地に伝播し、その政治文化は西欧ならびに東中欧のそれに近づいていった。ただし、このフレスコ画に描かれているのは、ビザンツ様式の王冠である。したがって、シェパードが論じた「天上からの王冠」も、東西の政治文化の融合を示す例と考えて差し支えない。

4. フレスコ画にみる支配権の象徴

第二次ブルガリア王国の教会美術にみられる支配権の象徴には、ビザンツの影響が強い。ゴシェウが論じているように、14世紀半ばに描かれた、イヴァン・アレクサンデル王の二つのフレスコ画では、同王の王冠と衣装はビザンツ皇帝のそれと同じように描かれている。一例目は、バチコヴォ修道院のフレスコ画であり、ここでは、同王がキリストと聖母に祝福されて天使から王冠を授与された姿で描かれている⁴²。ここに描かれた王冠は、ビザンツにおける皇帝冠と同じ、頭頂部が閉じた形態の王冠である。二例目は、パチカンが所蔵する、コンスタンティン・マナセスによる年代記のスラヴ語版であり、この例でも同王は、キリストならびに年代記作者と並んで中央に立ち、王冠を戴く姿で描かれており、天上からは天使が二つ目の小さな王冠を授けている⁴³。また、1259年にソフィア近郊のボヤナ教会に描かれたイヴァン・アセン二世のフレスコ画においても、同王は頭頂部が閉じた王冠を戴き、ロロスと呼ばれる正式の衣装をまとった姿で描かれている。その手にはアカキアと呼ばれる典礼具をもっている⁴⁴。しかしこの例では、イヴァン・

⁴¹ E・H・カントーロヴィチ（小林公訳）『王の二つの身体——中世政治神学研究——（下）』ちくま学芸文庫、2003年、114頁。

⁴² I. Goshew, "Zur Frage der Krönungszeremonien und die zeremonielle Gewandung der byzantinischen und der bulgarischen Herrscher im Mittelalter," *Byzantinobulgarica* 2 (1966), 166.

⁴³ *Ibid.*, 167. 以下も参照。Shepard, *op. cit.*, p. 154.

⁴⁴ Goshew, *ebenda*, 165-166.

アセン二世は王妃と共に描かれているが、頭上に王冠を載せる天使の存在はない。

ブルガリアに比べてフレスコ画が多く残されているセルビアにおいても、王冠にかんしてはビザンツにおける皇帝冠を忠実に模倣したものが多い。ソポチャニ修道院、アリリエ修道院、ジュルジェヴィ・ストウポヴィ教会、グラチャニツァ修道院、レスノヴォ修道院に描かれたフレスコ画では、ウロシュ一世、ドラグティン、ミルティン、ドウシャンの諸王はすべて頭頂部が閉じた王冠を戴いて描かれている⁴⁵。

他方で、西欧型の、頭頂部が開いた王冠の例もみられる。ドウシャニッチによれば、コトル市（現モンテネグロ）で鑄造された貨幣にはドウシャンとその子ウロシュ五世は、そうした王冠を載せた姿で刻まれている⁴⁶。こうしたダルマチア沿岸における教会美術にかんしては、ローマ・カトリック教会の影響も考えられる。セルビア王国が成立する以前に、ローマ・カトリック教会はゼータ王国（ドゥクリヤすなわちディオクレア）に王冠を授与していた。このため、ゼータ国王は、たとえばストンの聖ミハイロ教会では頭頂部が開いた形の王冠とともに描かれている⁴⁷。この地域ではローマ・カトリックの信者が多いため、西欧の政治文化を受容することに抵抗はなかったといえる。

国王がまとう外衣についても、ネマニッチ朝の早い時期からビザンツ皇帝の帝衣の様式が取り入れられている。ストウデニツァ修道院の宝物庫に保存されたラドスラヴ王の外衣は、その意匠を含め、ビザンツの様式にしたがっているし⁴⁸、アトス山のヒランド修道院にある教会の正面の柱廊に描かれたアンドロニコス二世パライオロゴスとミルティン王のフレスコ画では、両者は同じ衣装をまとっているように見える⁴⁹。また、アリリエ修道院に描かれたドラグティン王とミルティン王は、サッコスと呼ばれるビザンツ皇帝の外衣あるいは祭服をまとっている⁵⁰。こうした衣装は、先にあげた、ビザンツの年代記作者ニケフォロス・グレゴラスが示唆するように、ビザンツ帝国から下賜される場合もあったと考えられる。この点については、14世紀にドメンティヤンが著した『聖サヴァ伝』にも例がある。ドメンティヤンは、聖サヴァがアトス山の海域で海賊に遭遇したとき、所持していた「高価な衣（オロヴェリ）」を彼らに与えたと記している⁵¹。ラドイッチによれば、この「高価な衣装」は、ギリシア語で「オロペーロス」と呼ばれる絹の衣で、コンスタンティノーブルの宮廷工房で制作されたものとされる⁵²。

ネマニッチ朝の家系樹にかんするフレスコ画については、どのように解釈できるだろうか。王朝の創始者であるネマニャを根とし、ステファン初冠王、ウロシュ一世、ミルティン、デチャン

⁴⁵ Душанић, *op. cit.* 同書巻末に掲載された、図1、3、4、5、8を参照。

⁴⁶ *Ibid.*, 125.

⁴⁷ *Ibid.*, 122.

⁴⁸ Радојчић, *op. cit.*, 80.

⁴⁹ *Ibid.*, 220.

⁵⁰ Душанић, *op. cit.*, 128. および同書巻末の図3を参照。

⁵¹ Доментијан, *Живот Светога Саве и живот Светога Симеона*, trans., Л. Мирковић, Београд 1988, 139.

⁵² Радојчић, *op. cit.*, 80.

スキ、ドゥシャンといった諸王を幹あるいは枝とする家系樹のフレスコ画は、1321年～1360年にかけて、4例がある。デチャニ修道院の家系樹では、上部に描かれたドゥシャン王はキリストの祝福のもと、二人の天使から王冠とロロス（外衣）を授与されている⁵³。神による支配権の委任がネマニッチ王家になされる構図に、王朝意識を読み取ることができる。ラドイッチが指摘したように、こうした構図は、西欧でもみられたし、西欧美術の影響を受けて成立した可能性もある⁵⁴。この王朝意識は、そのまま中世的な国家概念に結びつくものであったのだろうか。先に述べたように、デチャンスキ王は、将来、王座に就きうる者として、ネマニッチ家以外の者も指定していることから考えれば、それを否定する要因もあるが、この点は、美術史の観点から分析が望まれるだろう。

いずれにせよ、オボレンスキーが別の文脈で指摘したように、こうした家系樹からも、現代のナショナリズムと同一視される「ナショナルな」意図を読み取ることはできない。中世における「民族意識」は、普遍的な世界観と結びついていたからである⁵⁵。その意味で、この家系樹のうち、マテイチュの聖母修道院に描かれた家系樹（1360年）において、ネマニッチ家の祖としてビザンツ帝国のコムネノス家および第二次ブルガリア王国のアセン家が描きこまれている点は、興味ぶかい⁵⁶。このことは、ネマニッチ家とコムネノス朝、アセン朝の血縁関係を示すとともに、12世紀後半にビザンツ帝国がセルビアにたいして行使していた上級支配権（たとえばアルコン＝ジュパン任命権）が、この家系樹が描かれた14世紀半ばにも、なお忘れられていなかったことを示すとは考えられないだろうか。12世紀後半のセルビアは、ビザンツ皇帝の上級支配権のもとにあり、おそらく、ステファン・ネマニャの大ジュパン（大族長）就任に深く関与したのは、ビザンツであった⁵⁷。オボレンスキーが示唆するように、ネマニッチ家とコムネノス朝の関係を示すフレスコ画は、他にもみられる⁵⁸。13世紀にストゥデニツァ修道院ならびにソポチャニ修道院に描かれた、ネマニッチ家にかんするフレスコ画には、ステファン・ネマニャの生涯、王妃アナ（ウロシュ一世の妃）の生涯が描かれている。これは、ビザンツにおいてコムネノス朝時代に描かれたとされる、現存しない、帝室の肖像画をモデルとする可能性があるという。この点も、ビザンツ帝室との血縁関係とともに、以上に述べた、12世紀後半における、ビザンツ皇帝の上級支配権という文脈から理解することができるのではないか。

盛期のビザンツでは、東欧の諸君主は、王冠やローブの授与、婚姻条約の締結などをしばしば求めた⁵⁹。それは、オボレンスキーが指摘するように、ビザンツ文明の恩恵を受け取ることによ

⁵³ Душанић, *op. cit.*, 63. および同書巻末の、図9を参照。

⁵⁴ Радојчић, *op. cit.*, 42-43. イングランドにおいても「チューダー・ローズ」のような家系樹の例がある。指昭博『図説イギリスの歴史』河出書房新社、2006年、44頁。

⁵⁵ Obolensky, "Nationalism in Eastern Europe.", p. 2.

⁵⁶ Душанић, *op. cit.*, 64.

⁵⁷ 12世紀後半まで、ビザンツ皇帝は南スラヴ諸族にたいしてアルコン＝ジュパン任命権を行使している。

⁵⁸ Obolensky, *The Byzantine Commonwealth.*, pp. 346-347.

⁵⁹ *Ibid.*, p. 288.

てえられる利益の方が、大きかったからである。そうした事情は、ビザンツが政治的に弱体化した14世紀以降においても、おそらく同じであっただろう。

ここで、セルビア王冠について、第二次ブルガリア王国の例も視野に入れてまとめておきたい。14世紀のデチャニ修道院に描かれたネマニッチ家の家系樹では、ドゥシャン王が天上から王冠を授与されている。したがって、この例も、シェパードがあげる「天上からの王冠」の例といえる。このように、「天上からの王冠」の例が14世紀にみられ、それが、先にあげた、君主文書における「威嚇する王冠」の例（1275～1347年）と、年代的にはおおむね一致する点は、偶然ではないのかもしれない。つまり、罰を下す王冠の力は、天上に由来すると考えるのが妥当といえるのではないだろうか⁶⁰。「神による支配権の委任」という政治思想は、西欧にみられたし、ビザンツにおいても、天上から皇帝冠を授与された皇帝の例がある⁶¹。13、14世紀におけるセルビア、ブルガリアの支配者は、おそらく、この両者から「神による支配権の委任」という思想を受容した。そのさい、ビザンツから直接、冠を授与されることにより、権威づけをおこなうこともできた。そして14世紀の政治変動により、支配階層は「天上からの王冠」を教会や修道院のフレスコ画において表現できるようになった。同じ時期に、セルビアには西欧あるいは東中欧から「王国の王冠」概念が伝播し、個人としての王とは別物であるところの抽象的な国家観も、萌芽的形態として生じることとなった。

5. 即位時の誓約について

中世後期の西欧では、支配者が即位時におこなう誓約については不可譲誓約が知られているが、ビザンツ世界においては、即位時にどのような誓約がおこなわれていたのであろうか。ビザンツ皇帝による誓約については、14世紀半ばにおける、プセウド・コディノスによる『官職について』のなかに記されている。同書には、ビザンツの様々な爵位保持者、官位保持者の職務や衣装、皇帝の戴冠式、および専制公をはじめとする高官の就任式、あるいは総主教の就任式、そしてその他の宮廷儀式が詳しく記されている。それによれば、皇帝が即位時におこなった誓約は、次のようになされた。

…余は、我らが至聖にして神聖なる教父たちが、その地域で、正当に、教会法に則り、非の打ちどころなく制定したすべての事柄を、確認し、受け入れる。同様に、余は、聖なる教会の敬虔なる、真実の下僕にして息子でありつづけ、今後とも変わることなくそうであることを、ここに約束する。加えて余は、聖なる教会の守護者にして弁護者であることを約束す

⁶⁰ 前掲の、註17であげた筆者による書では、セルビア王冠の威嚇力が初代大主教である聖サヴァにあるとしたが、この点については、修正が必要とされる。前掲拙著、278頁を参照。

⁶¹ Shepard, *op. cit.*, pp. 145-147.

る。また、臣民にたいしては慈悲深く、彼らを愛し、公正に、適切であるべきことを約束する。また、殺人、四肢損壊、それに類する事は、可能な限り避け、すべての真実と正義を重んじることを約束する...⁶²。

ここにはビザンツ皇帝の義務として、教会法と正義の遵守、臣民への配慮があげられている。『官職について』には、この他にもビザンツの国制を考えるうえで興味ぶかい記述がみられるが、それについては、後に触れることにし、ここでは、次に、セルビアにおける国王の誓約をうかがわせる記述をみてみたい。ウロシュ五世は、1357年に二人の貴族、すなわちバセット・ビヴォリチッチとトゥリペット・ブーキッチに寄進文書を発給している。その前文に、次のような文言がみられる。おそらくこれが、同王が即位時におこなった誓約の内容を反映していると考えられている⁶³。

かつて、我らの帝国の主人にして親である人々、そして今は亡き聖なる皇帝は、それぞれの規則を定めてきた。我らの帝国は、それらすべてを何一つ損なわず、我らが帝国の母であり、敬虔な帝妃であるイエレナ殿下、主にして尊き総主教のサヴァ〔四世〕聖下、およびすべての府主教、修道院長、我らが帝国の配下にあるすべての強大な貴族、セルビア人のすべての集会と協議したうえで承認し、黄金印璽付き文書や皇帝の言葉を記した命令書を記すこととする⁶⁴。

みてのとおり、ウロシュ五世の「誓約」は、ビザンツにおける皇帝の誓約に比べて簡潔な内容となっている。『官職について』のなかにあげられた、ビザンツ皇帝の誓約を想起させるような文言はほとんどない。わずかに、この文言の後半部に記された高位聖職者、すなわちすべての府主教、修道院長との協議にかんする部分が、教会への配慮をうかがわせるものとなっている。

⁶² J. Verpeaux, Pseudo-Kodinos, *Traité des Offices*, Paris 1966, 253-254. (以下、*Traité des Offices*. と略) : Προσέτι γε μὲν βεβαιῶ καὶ στέργω ὅσα περ ἐδογμάτισαν καὶ ἐθέσπισαν οἱ κατὰ τόπους ἀγιώτατοι καὶ θειότατοι πατέρες ἡμῶν ὀρθῶς καὶ κανονικῶς καὶ ἀνεπιλήπτως. Ὡσαντως ὑπισχνοῦμαι ἐμμένειν καὶ διηνεκῶς εὐρίσκεσθαι πιστὸς καὶ γνήσιος δοῦλος καὶ υἱὸς τῆς ἀγίας ἐκκλησίας · πρὸς τοῦτοις εἶναι καὶ δεφένσωρ καὶ ἐκδικητὴς αὐτῆς, καὶ εἰς τὸ ὑπήκοον εὐμενῆς καὶ φιλάνθρωπος κατὰ τὸ εἶκός τε καὶ πρέπον, καὶ ἀπέχεσθαι φόνων, ἀκρωτηριασμῶν καὶ τῶν ὁμοίων αὐτοῖς κατὰ τὸ δυνατόν, κατανεύειν τε εἰς πᾶσαν ἀλήθειαν καὶ δικαιοσύνην. 『官職について』にかんしては、以下も参照。R. Macrides, "Inside and Outside the Palace: Ceremonies in the Constantinople of Palaiologoi," in: *The Byzantine Court: Source of Power and Culture, Papers from the Second International Sevgi Gönül, Byzantine Studies Symposium*, eds., A. Ödekan, N. Necipoğlu, E. Akyürek, Istanbul 2016, 165-170. ビザンツにおける皇帝の即位儀礼については、以下も参照。G. P. Majeska, "The Emperor in His Church: Imperial Ritual in the Church of St. Sophia," in: *Byzantine Court Culture*, pp. 1-11.

⁶³ Т. Тарановски, "Majestas Carolina и Душанов Законик," *Глас српске краљевске академије*, 142. други разред 80 (1933), 61.

⁶⁴ Законски споменици српских држава средњег века, ed., С. Новаковић, Београд 1912, 310-311.

上記の文言について論じたタラノフスキーは詳述していないが、文中にある「それぞれの規則」については、セルビアの支配者たちは口頭で誓約したのであり、文書化しなかったと考えるのが妥当だろうか。そうであるとすれば、「それぞれの規則」のなかで、その他の誓約内容とともに、ビザンツにおける皇帝の誓約もそのまま、あるいは形を変えて受容され、上記のように記された可能性はないとはいえない。

第二次ブルガリア王国ではどうだろうか。1378年にイヴァン・シシュマン王がリラの聖イヴァン修道院に発給した黄金印璽付き文書には、冒頭に、「宝石と真珠で覆われたディアデマ」にかんする記述があり、「しかしそれだけでなく、〔ブルガリア王は〕堅信と信仰、神の聖なる教会への崇拝によって自身を飾った」とされることは先に述べたとおりである。ここでは教会への崇拝とキリスト教信仰が支配者の義務とみなされており、この文言に自身が即位時におこなった誓約の一部が反映されていると解釈することは可能である。もしそうであるとするならば、第二次ブルガリア王国における支配者の誓約は、教会への配慮という点で、ビザンツ帝国における皇帝の誓約と共通点があると解釈することはできるのかもしれない。

いずれにせよ、セルビア王国、第二次ブルガリア王国において、支配者が、西欧と同様に即位時の不可譲誓約をおこなった形跡はみられない。不可譲誓約とは、国王が、高位聖職者や大小貴族に相談せずに王国の領土を自らの意思のみによって譲渡したり割譲したりしないという誓約のことである。不可譲誓約の起源は、カントーロヴィチによれば、11世紀にローマ・カトリック教会の大司教ならびに司教が叙階時にローマ教皇にたいしておこなった忠誠誓約にあった。それは、大司教や司教は、まずローマ教皇に諮問せずに、教皇座に属する財産を譲渡したり、新たな授封をおこなったりしない、という誓約である⁶⁵。たしかに、ブルガリアやセルビアの支配者は、ローマ教皇から王冠を授与されたが、このような誓約や文書形式は、受容しなかったと考えられる。ただし、現存する史料から考えて、『官職について』にみられるような、ビザンツ皇帝の即位誓約が文書の形式でそのまま取り入れられた形跡もないようである。したがって、この二か国に西欧の不可譲誓約がみられない原因を、ビザンツの政治文化に求めることは、留保せざるをえない。

即位時の誓約以外の政治文化にかんしては、これら二か国は、フレスコ画にみられる支配権の象徴の他にも、ビザンツから受容したものが多い点も、指摘しておきたい。たとえば、『官職について』には、皇帝の職の「移ろいやすさ」にかんする記述がある。

サッコス〔祭服〕は、皇帝の職の神秘性を表し、アカキアと呼ばれる球体物は、先に述べたように、皇帝が卑しく、死すべき存在であるから、誇ったり傲慢になってはならないよう、戒めるものである。また、ハンカチは、その職が移ろいやすく、ある者から別の者へと移る

⁶⁵ E. H. カントーロヴィチ、前掲書、95－97頁。

ものであることを示す。そして、剣は、権威を意味している⁶⁶。

支配者の職の移ろいやすさについては、別稿で検討したように、テオドシエによる『聖サヴァ伝』やダニール二世による『セルビアの諸王ならびに諸大主教の列伝』に記述がある。テオドシエとダニール二世は、セルビアの王冠や「高価な紫衣」、あるいは「玉座」を、「滅び、移りかわる」ものとみなしている⁶⁷。これと対照的に、12世紀ルネサンス以降の西欧においては、現世の「力、権威、威厳」に永続性が宿るとみなされるようになった⁶⁸のと連動して、不可死の王や国家という観念が成立した⁶⁹。「力、権威、威厳」を象徴する王冠や玉座が滅びやすく、移ろいやすいものであるとする文言が、直接、ビザンツから受容した思想であるかどうかは、今後の課題としたいが、こうした記述からうかがえるのは、バルカン半島の、この地が12世紀ルネサンスの直接的な影響の外にあったということである。

6. むすびにかえて

11世紀以前の、ビザンツにおける外交の基本的な方針は、バルカン半島では、ドナウ川以北で異民族の攻撃の芽を摘み取ることを目的としていた⁷⁰。13世紀以後、バルカン半島に第二次ブルガリア王国、セルビア王国、ボスニア王国の三か国が成立するにおよび、こうした政策は変化を蒙った。しかし、ビザンツ帝国の政治的求心力は、政治的には弱体化したとはいえ、14世紀以後も、著しく弱まったとまではいえないし、文化的優越性は維持されている。そうした点について、本稿では、冠の授与や教会美術という視点から確認した。地域と領域によってビザンツの影響力の度合いに強弱はあるが、オボレンスキーの論は、政治文化にかんしてもおおむね妥当と思われる。

第二次ブルガリア王国においてビザンツから冠がどのように授与されたかという点について課題が残るが、セルビアにかんしては、冠を授与された例がある。ミルティン王の場合のように、授与の依頼がビザンツの不信を買い、失望をもたらすこともあった。本論では論じえなかったが、教会建築・教会美術にかんしては、地域によって、もっとも多様性がみられる領域であるといえる。セルビアにかんしては、教会建築は西欧におけるロマネスク様式の影響を受け、フレスコ画やドームにかんしてはビザンツの影響が強いという、折衷様式がみられる⁷¹。

⁶⁶ *Traité des Offices.*, 201-202.

⁶⁷ Теодосије, Жумија, trans., Л. Мирковић, Д. Богдановић, Београд 1988, 207. Данило Други, *op. cit.*, 62.

⁶⁸ ソールズベリのジョンによる『メタロギコン』を参照。『中世思想原典集成 8 — シャトルル学派 —』（編訳 / 監修：上智大学中世思想研究所 / 岩熊幸男）平凡社、2009年、801頁。

⁶⁹ カントーロヴィチ、前掲書、156頁。

⁷⁰ Obolensky, *The Byzantine Commonwealth.*, p. 275.

⁷¹ こうした教会建築・教会美術の折衷様式である「ラシュカ派」については、以下を参照。Z. Gavrilović,

ビザンツから政治文化を受容したブルガリア、セルビアは、おそらく、受容しうる面と受容しえない面を比較的柔軟に選択しながら、その諸要素を取り入れていった。その結果、地域によっては、東西文化の融合を色濃く映し出す政治文化が生まれた。その例がセルビアの王冠であったと考えたい。また、同様のことが、ネマニッチ朝の家系樹にかんしてもいえる。というのは、ラドイッチが示唆するように、この家系樹が西欧美術の影響下に生まれたとしても、そこに描かれた諸王はビザンツ様式の冠を載せた姿で描かれているからである。

では、シェパードが指摘する「天上からの王冠」について、当時の支配階層や知識人は、そこに永続性が宿るとみなしていただろうか。この点についてはフレスコ画家、そしてそれを描かせた支配階層は、王冠が、神から個別に、一度ずつ授与されるものであったか、それとも、天上から授与されるという形で、王冠の永続性を表したかったか、のいずれかの可能性が考えられる。この点については、本稿で述べたように、ほぼ同時代の記述史料に、王冠は、滅び、移ろいゆくものと記されていることから考えて、前者の立場を取りたい。

“Between Latins and Greeks: Some Artistic Trends in Medieval Serbia (13th-14th Centuries),” in: Gavrilović, *ibid.*, p. 114.